

書を載せたる中に「頓莫賀新立、移地健有孽子、及國相梅錄、各擁兵數千人相攻、國未定」と記せり、新唐書回鶻傳に、同じく光晟の上言を録して「今其國亂、兵方相加」と曰へるものは、即ち之を約筆したるものに外ならず、此の動搖が何時鎮定に歸したるかは明かならざれども、此の年六月京兆尹源休を使とし、可汗を冊して武義成功可汗と爲したるより考ふれば、當時其の位置は既に確立したるものなりしを推知し得べし。

此の際唐は回鶻内部の動亂に乗じて、從來回鶻に對したる態度を更め、之と絶たんとしたりしことは新唐書回鶻傳、舊唐書張光晟傳、同書源休傳等の等しく載する所なり、即ち豫て代宗の命を受け、振武に鎮せし張光晟は、此の年回鶻の酋長等が多くの婦人を掠奪して歸らんとするを見、遂に悉く之を斬りしかば、^{二〇六}德宗は之を機として回鶻と絶たんとし、中人を其の國に遣して事情を説述せしめ、既に冊命の使を奉じて其の途に上りたる源休をして、還りて命を太原に待たしむるに至れり、然れども當時の形勢は尙德宗をして其の企圖を實行せしめ得ざりしが如く、翌年に至りて更に源休に命じて回鶻に至り、先に殺したる酋長等四人の屍を返し、且つ曲の回鶻に在るを辨せしめしが、回鶻は之に屈せず、遂に唐に對して、損害を被りたる馬直として絹一百八十萬疋を速に償ふ可きを要求し、唐は之を拒む能はずして、^{二〇七}建中三年五月帛十萬疋、^{二〇八}金銀十萬兩を與へ、纔に回鶻の意を解き、時局を收むるを得たり、此の如くにして德宗の雄略はこゝに頓挫を生じ、以後又もや回鶻は前の可汗の時代に於けると同じく、唐を抑壓したりしならんと思はるゝが、^{二〇九}貞元三年八月に至りて、可汗が使を遣して朝貢し、且つ和親を請ひ、德宗が之を許すに及び、兩者の間には急に親善の關係を生ずるに至りしが如し、蓋し公主下降のことは前代牟羽可汗の時にも行はれたりしが、然も其の公主と稱するものは、實は僕固懷恩の女にして、磨延啜の時に於るが如く天子の骨肉に